

者百六十四人、戦死場所の確認できた者約三十人、他の百三十数人の戦友は津嘉山、摩文仁の乱戦・混戦の中で人知れず散華されたのであった。

嗚呼南西の島、沖繩に散華せる戦友の霊に合掌。

## 北朝鮮脱出

### 五度の奇跡

神奈川県 三好 久吉

昭和十六年七月六日「第七師団野砲兵第七連隊ニ入隊ス可シ」という臨時召集令状が来た。この時私は二十六歳、長男が生まれて四十日目、突然配達された赤紙が私の運命を変えてしまった。

八月二十日、関東軍西東安の砲兵団に配属され、十月八日、日米開戦、戦線は北に南に拡大し、昭和十八年の暮れまでに三回も本隊が出動した。連統の動員に下士官の欠員が生じた我が部隊は、三カ月毎に下士官の抜擢試験を実施したが、召集解除を待っていた私

は試験答案を書かないためいつも不合格。不真面目な私の態度に激怒した准士官に毎回数十発のビンタを喰う。重なる制裁にも屈服しなかった私は、こうして部隊名物の不良兵になり、当然のことながら、本隊出動毎に残留兵となり、次の部隊編成の小間使いを務めていた。

その二年の間に勇躍して出陣した部隊は、海に島嶼に全滅、沈没等の悲報続く。このような時、悪運か強運か生き延びて不良兵の汚名に甘んじていた私にも遂に出動の番が来た。その時、昭和十九年二月「北支派遣呂第一四八四独立砲兵大隊要員五人選抜セヨ」の命である。最古参の不良兵が擱み出されたのは極めて当然である。軍用列車の到着した所は戦場の一隅、黄河東岸の太原であった。日没から始まった散発的な銃声に身震いし、ここは戦地なのだ、たとえようのない恐ろしさを知った。

集結した七〇〇人は全くの不良兵集団、中隊長は陸士出身の大尉だったが、将校は一年志願の予備少尉、下士官は満州各地の現地召集、兵隊は第二乙種で四十

二歳、人さし指が無かったり、片眼とか全くの廃兵部隊である。これでは生きて帰れない。このまま死ねば故郷の妻子に申し訳ない。それならば肩の星が一個でも増えるよう立派に戦い天命を待とう。心境は急変した。訓練も拙劣未熟のまま、二十年三月まで、北支・中支・長沙と転戦すること二年間生死の戦を続ける。その間に戦局は大きく不利に展開し、本土防衛の命令が出て杭州湾の嘉興より北朝鮮の咸興まで、夜間だけの大陸輸送に三カ月を要し、ソ連軍迎撃用の陣地を夜も寝ないで構築したが、砲弾の発射は一発も無く終戦になってしまふ。八月十八日、武装解除、全部隊ソ連軍の捕虜となった。

翌十九日夕刻、俘虜輸送列車（有蓋貨物車）到着、全員に乗車命令が出る。前日午後から夜にかけて作戦書類一切を焼却。その火の中に命の次に大事な軍隊手帳、五年間の写真、手紙等、それに階級章など燃える物全てを灰にして証拠を消した。

万事終わりである。もう軍隊ではない、命令も無け

れば服従もない。各人の自由意思で生き延びよう。分隊十六人を集めて「俺は逃げるが、集団は危ないから一人宛行こう」と集合場所を決めて固い約束で別れたが、今は猶予がない。

捕虜になれば必ず殺される。九死に一生を賭けて逃げれば生還の望みは微かにある。命令を無視して暗夜の農道を夢中で走った。少しでも遠くへと、昭和二十一年八月十九日午後八時過ぎである。夜が明けてソ連軍に見付かれば一発で撃たれて死ぬ。夜が明けるまでには完全に逃げなければと山中に入る。道筋にソ連兵が積み残した軍馬を警備していた第二分隊の分隊長久保清さんに、一緒に逃げることを勧めたが彼は同意しなかった。

分隊長から十四年式拳銃一挺と弾薬数十発をもらい一人で逃げながら考えた。拳銃は持ったが見えない敵に對する恐ろしさが増して急に臆病になり、行き先で敵對する朝鮮人に会ったら数人は撃つても反撃されれば死は確実に免れない。それでは本隊を裏切り逃亡した意味がない。

死ぬ気でやれば怖いものはないとは嘘だ、生きるために逃げたのだから、朝鮮人を敵にしたり殺そうとは毛頭考えないが、自衛のためと発砲すれば先の見えないう逃走の彼方に限りない死の不安が続く。生き延びる確立は全くない。身を護るための拳銃が死を招くとの結論に達し、逃げる途上にあつた橋の上から分解した拳銃を川に捨てた。

闘う力はなくなつたが一人では何も出来ない。前方の如何なる困難、屈辱にも耐える覚悟があれば殺されないと、非武装無防備が最善の防衛と知る。後は敵対することが起こつても逆らわず専ら逃げることに決めた。

南へ行くと思える道を歩いていたら鉄道線路に出た。あとは線路を歩くだけだ。歩きづらさが迷わず行ける。二時間程歩いて疲れたため土手に座って休んでいると線路に人の足音がする。夜が明けてきたので素早く土手に伏して通り越させようと見ていると、軍衣を着ていることが確認出来た。何と呼んだか忘れたが、その人は私の分隊で後馬御者をしていた吉田堅哉

さんだった。味方が出来た嬉しさに一緒に逃げた。結局東京まで同行した。

逃走から三日目の深夜、十五、六歳の少年が三八式歩兵銃を突き付けて嚇し検問所に連行、ほとんど裸にされ追い出された。悔しさは頂点に達したが武器がなく無防備のため助かった。もし武装していたらこう簡単には終わらなかつたはずである。しかし、裸ではいられない。夕暮れに野良婦りの老人の衣服を盗り、赤松の凹みに隠れて畑の野菜を盗み食ひした。当然のことながら下痢に悩まされたり、藪蚊に刺されながら木陰を這い、村人に見付からぬように夜を待つ。人の途絶えた街道を前後を見据えて魔の逃避行である。日没を待つて山を下り、夜は雨に濡れても休まず、いつまでも、どこまでもあての無い毎日であつた。

分断された南北朝鮮を知らず専ら南を目指して、目的地も判らぬまま歩いて、十日ぐらいで平壤に着いた。そこには数百人の日本人引揚者がひしめき合い、即席的な家族構成をし、偽装された俄か夫婦を作り、無法なソ連兵の検問を免れていたようだった。

私等は後日の足手まといになることを避けて単身のまま船員、工員等に化けて年配の人を雇い主にして検問を通過し、朝鮮人の運転する難民列車に乗り満州に着いた。終点のため全員が下車するとそれぞれどこかへ行つたが、その地に永年住みとどまっていた日本人世話人会の人達が、行くところの無い私達を迎えてくれ、無人の家に連れていき、留守番をしてくれるようにと頼まれた。その家の家財調度品は全く安物ばかりで、台所には炊きたての御飯が置き去りのまま、突然に家人が蒸発した状態で、その家を守るために堅哉さんと私を住ませたようであつた。

空腹なので御飯を食べた。教時間を経ずに薄暮になり、近所で銃声が聞こえ、突然六尺もあるソ連兵が二人乱入し、「マダム、マダム」と怒鳴りながら部屋や押し入れを探しマダムを出せと強要する。「ニヤット（いない）」と答えると、至近距離から発砲して引き揚げていった。

その後も散発的に銃声が聞こえて、次のソ連兵がいつ来るかと不安になり体の震えが止まらない。徐々に

静かになり時間も過ぎて、無法侵入が終わりと思ひ戸外に出ると、近所の人も同様で、逃がし、隠した婦女は発見され、暴行を働いたのは囚人部隊だと聞いた。

こんな危険からは早く逃げようと、土地の人に港に行ける道を聞いていたら、船を盗られた船員が三人一緒に行くが決まり、無名の川だったが戦車が渡れない橋の袂で歩哨が銃を抱え戦車にもたれて眠っていた。幸い暗くなって視界がきかぬので、その兵の足元を虫が這うようにして逃げる事が出来た。

目的は船員と一緒に近いところで漁船を盗み、沿岸を南下する予定でいたが、海上は総てソ連軍が占領しているという事で諦め、知らない夜道を方角を探り、再び野宿を重ね、何日目か六十キロ程歩いて夜が明けて、隠れ場所を探しているとき突然拡声器の大きな声で「そこにいる人出てこい。ここからはアメリカです。お国まで送ります」という。

何度も呼び出されたが出て行かないで、丘の上から道路を見るとジープが数台いて眼鏡で見ている。どこから出てきたのか三人の日本人が投降してジープへ連

れて行かれたのを見た。私等二人はそれを見て観念してMPに捕らえられ、ここが三十八度線であることを初めて知った。

京城に送られ三日間の取り調べを終わり、宿舍を与えられ、翌日から占領された陸軍の兵舎の清掃使役に使われ、毎日捨てる物を積み込むトラックの上乗りに従事した。その荷物は主として食料品であつて、敗戦で解隊された我が軍隊が毒物を混入した疑いの濃い液体の物が多く、捨て場に着くと大勢の朝鮮人が先を争つて奪い合う凄惨な修羅場となる。怪我などの事故を防ぐため米軍が車上から空に向けて威嚇しても全く効果無く、更に争いが激化するので投棄作業が進まない。そのため米軍の命令で、味噌樽、ドラム缶の白紋油、酒、酢等の重い物を連続投下した。

京城には日本軍一個師団があり、その兵員の使い残した膨大な物資の量は、まさに世界一の塵捨て場と使役従事者が言っていた。約五十メートル程隔てた空き地に朝鮮人のそれぞれの家族が戦利品の拾得物を積み

上げ、他の者に横取りされぬように棍棒等を持って見張りをしていた。

十月の初め朝鮮の朝は寒くとも我々使役は、上衣一枚を着ただけで作業場に行き、被服倉庫に捨ててある梱包から襦袢を数枚着込み、宿舍に帰ってから群がる朝鮮の人に売って資金を稼いだ。使役に出ると乾麵包（乾パン）一袋、米、合と僅かな金券がもらえたが、この資金は逃走資金として蓄えていた。

数日して釜山行きの順番が来て列車に乗ったが、少し走ったらトンネルに入って止まり、「燃料が無くて運転出来ない。薪を買ってくるので一人百円宛出せ」と強要された。次は坂が登れない、また百円と理由をつけては貴重な逃走資金を取られてしまった。

その鉄道員は敗戦まで機関助手をしていた朝鮮人であった。そんな苦勞を重ねて釜山に着くと、前方の車輛は乗客、後方は荷物車であったが乗客はすぐには降ろさず、駅員は後方の荷物車から乗客の荷物を降ろして刃物で梱包を切り裂き、中の物を鉄道員の家族のい

る柵外へ放り投げる。家族はそれを掠奪する。取られた乗客は空の梱包に啞然としてなすすべもない。そのような暴力行為は列車が着くたびに日常茶飯事と後で聞き、切齒扼腕するも如何ともしがたかった。永年、日本人に搾取されてきた民族の報復としても甚だ情けない。敗戦国民の無力悲哀を痛切に感ずるも怒りのやり場もなかった。

かくして駅を出て私達は示された収容所である彰徳小学校へ着いた。学校の体育館には大勢の先着引揚者がいて、乗船の順番待ちで溢れていた。

釜山に着いて七日日、米兵が来て「明後日乗船させる」と伝えて来たが考えた。何故かと言うと、一般の引揚者は乗せずに帰還軍人だけ先に乗せるというのが疑わしい。シベリアへ行かず今まで生き延びてきたが、あの船に乗ればどこへ運ばれるか判らない。五年の間、何度も死に神に逆らって生還を夢見て来たのに、家族の顔を見るまでは絶対に死なないで必ず逃げ切ろうと心に決めた二人であった。

私達は波止場に溢れている難民の群れに潜入し密航

船を探したら、幸いにも適当な船を見つけることが出来た。その船は日本から引き揚げる朝鮮人を乗せて来て博多へ行くということで、二百円払って乗った。翌朝出港すると思い、乗船客も大勢待っていたが「出港準備が出来ない」「船員が一人もいない」という。船主一人がいて調べてみると、船の神棚に置いた乗客の運賃を船長が盗んで逃亡し、その上機関部品を外して捨てて動けなくなったことが判ったが、船長以下全員が朝鮮人で、仮に捕まえても盗まれた金は戻らない、諦めてくれと、船主は事情を説明し乗客に謝り一応は落ち着いたが、金のある人は他の船に乗り替えて下船した。

下船出来ない船賃の無い人達と私等は、船に残って対策を考えた。不幸中の幸いで、船倉に使い残しの米を見つけて食いつなぎ、夜は船で寝たが船を動かせる見込みがない。途方に暮れているとき船主は知り合いを捜すと言ってどこかへ行った。

その時、呆然としている私等の傍らに無人の伝馬船が漂ってきた。なすこともなく、何も出来ないまま私

達二人でその船を捕まえて港内見物に出たところ、海軍の掃海艇が三隻入港してきた。珍しいので見物していると、その中の水兵がなんとなく関心を持ってきて、私等の事情をわかり船を見ようと小舟に同乗し見に来て「この船は動くようになる。艇長に頼んで母艦で直してもらえそうだ」と言うので、掃海艇まで送っていった。

直してもらえば丸儲けと思い、翌朝、昨日の艇に行くかと待っていたように救助艇で曳航して母艦に横付け、クレーンで吊り上げて船腹を開き、捨てられた部品の製造を始めてくれた。「沖は数日荒天で掃海作業は出来ない。海が凪ぐまでに修理はできるが船長はいるか、機関長はどうする」と聞かれた。吉田堅哉さんは漁船の汽缶士だが、船長は船主ができるかと思っただがいらない。掃海艇の長は「速成でもやる気があるなら習え」と勧められた。私が無謀にも習うことになった。

外海は荒れているが港内は静かで、時化が終わり凪

ぐのに三日はかかると予想し、即座に講習が始まり、実習の出来る機会が無かったが機関長との合図連絡方法、海図の見方、羅針盤と操舵法など、船主も経験があるのでにわか仕立ての代用船長になった。この船は二〇トンの木造トロール船で、陸軍の徴用を解かれ博多から帰国する朝鮮人を乗せてきたが、船員は皆朝鮮人で、帰りはその船員で日本人の引揚者を乗せ博多に帰るために船員の監督に乗って来ての結果がこの惨状だと、船主が話をしていた。

修理を終わり船を海上に下ろして港内での試運転結果は良好とのことである。母艦から別れる時に「重油もやりたいが、米軍が管理しているからやれない。しかし、米はやれる」と言って二袋もらい別れを告げて、定位置のない岸壁に着き、大勢の難民の中から乗船希望者を募り、事情を説明して「運賃は無料だが燃料を買って欲しい」と頼み、重油ドラム缶二本買い、五十人に乗せた。

その頃、引揚船は帰還兵と軍関係者優先で、一般人は乗船の見込みが無く、従って密航希望者は多かつ

た。海は凪いでいた。いよいよ出港の時、海軍さんに教えられた重要事項「一、絶対に晴天。二、海図で方向を定める。三、方向が定まると水平線に一カ所だけ霞んで見える島が対馬」を頭にたたき込み、全身硬直の心境で再び決死の玄界灘へ。

操船には少し慣れたと思っても何が起きるかかわからない。緊張の連続で外海はますますうねりが大きくなり、波のうねりを登るのに十分から十五分程、下るのも同じくらい。頂上からは数十キロ彼方まで見えるが下るのは千尋の谷へ落ちる思い。その荒波に蟻の這うような進みを続け、午後三時頃、うねりの頂上と思わしきころ、後方に大きな船が高速で来るのが見えた。

そのうねりから下って、次のうねりを登りきった時、南の方向に進んでいた先刻の船の先端に巨大な水柱が立ち触雷の瞬間を見た。乗船している全員が見た。この辺は機雷があるというので皆で前方を見張り、もし見つけたら急速迂回で避けようと監視を続けていたが、次のうねりに登った時には、その高速船の

姿は既に没して船体は見えなかった。

我が船は、さらに見張りを続け航行していると、意外に早く対馬の島に近づいた。島に接近すると二隻の小舟が来て、難なく入港することが出来た。上陸し与えられた宿舎に着くと、三人を便乗させてくれと頼まれた。即座に「満員だから」と断ると、その人達は先刻触雷して沈没した「タマ丸」という二百トンもの鉄船で、水没直前に海に飛び込んで島に泳ぎ着いたという。便乗を強く頼まれたが、全員が見た触雷の恐ろしさを悟り、明朝の出港を思案中にその三人は水兵さんであると知った。

彼らは「この海域は機雷原で、最も危険だが、この船は木造で吃水が浅いから敷設機雷にかからない。浮遊機雷は目視出来るので昼間の航行は安全」と説明され、「あとは博多まで船長と機関長を引き受ける」ということで、三人の海軍の乗船が決まり、三日目は緊張することなく博多港に着き、出迎えた漁業組合の人に引き渡し、生きながらえて三百キロメートルの玄界灘を三日がかりで乗り切ることが出来た。

この船は「橘高丸」で船主の名は橘さんとだけ覚えてはいるが、年齢はその当時五十五歳ぐらいたった。船を下りて港に出張していた引揚援護局から引揚証明書と無賃乗車券の交付を受け、東京行きの列車に乗り、二日目の午後、東北本線に乗るために山手線に乗り換えて上野で下車する時、大変な混雑で吉田堅哉さんを見失い、三十分ほどホームで待っていたが遂に会うことが出来なかった。

昭和十九年二月より北支、中支、南支と転戦して、満州、北鮮で終戦、ソ連軍から逃れ東京まで二カ年、幾多の死線を越えて生死を共にして来た無二の親友を遂に失った。常に一緒にいたので、お互いに確かな住所も知らずに捜すすべも無いまま現在消息不明、ある新聞の尋ね人欄に掲載を依頼したが、存命で何らかの情報を得られるか期待している次第である。

奇跡は二度と起こらないというジンクスはあるが、偶然の連絡で生還を得られた私は、九死に一生を賭けた一度の奇跡か、神仏の加護か、命拾いの偶然は、伝

馬船を拾う、対馬海峡の暴風、掃海艇との出会い、無謀な我が船長、タマ丸の轟沈、以上五回の偶然がなければ逃亡成功の終わりは無かったと思う。

北鮮からの逃亡六十余日、その半分は悪夢の毎日、死の恐怖に怯えながら逃げ、十月二十日夜、我が家の玄関に入ることが出来た。ソ連に捕らえられ、シベリアの凍土と化している多数の戦友を思いご冥福を祈る日々であり、奇しき運命の流れに無量を感じる。

## 吾れ三度・国家の干城となる

愛知県 近藤 蔵 一

私は大正三年八月十五日長男として生を受け、姉と妹の三人兄弟であった。その年は内外共に多事多難な年で、内では山本権兵衛内閣が総辞職し、第二次大隈重信内閣が組閣し、西洋においては、第一次世界大戦の火蓋が切られた。